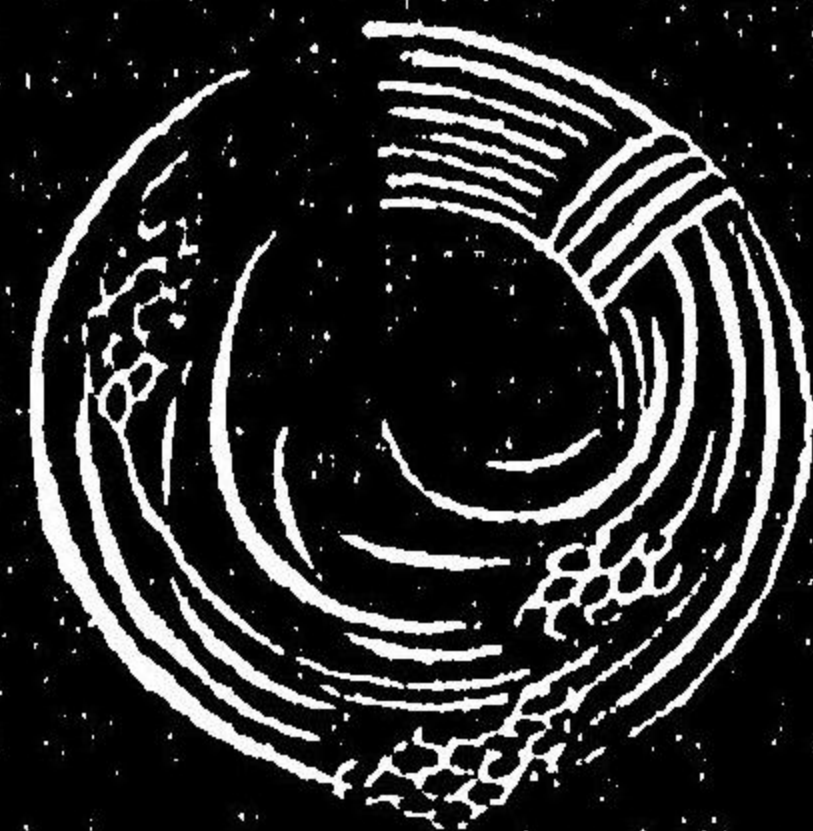


218
255



穴守稻荷縁起



特48

744



陸海軍
御用

登録商標



謹告

●ラム酒は御好により強弱の二種發賣致し候、又壘詰の外升賣も仕候間御最寄の酒店にて多少に拘らず御買求め願上候

●ラム酒は冬期には爛を致候得ば飲心宣敷候、又夏期には氷に冷し候得ば味尤も宜く候、要するに四季の御飲料として至極御便利の良酒に御座候

●ラム酒は「フーゼル」油と申候酒毒無之候間御常用なされ候も決して中毒の憂無之候、適宜に御飲用なされ候は、大に健康を助くる衛生酒に御座候

●ラム酒は味美にして價格頗る安く又少量にて酔を得ると多く御徳用に候間御酒家無二の好伴侶と存じ候

●ラム酒の容器には内務省衛生試験所分析表貼付有之候間御熟覽願上候

製造元

東京深川區小名木川通

發賣元

東京日本橋區小舟町三丁目

日本精製糖株式會社

ラム販賣合資會社

電話浪花千八百四十番

特48

744



陸海軍
御用

登録商標



謹告

●ラム酒は御好により強弱の二種發賣致し候、又屢請の外升
 買も仕候間御最寄の酒店にて多少に拘らず御買求め願上候
 ●ラム酒は冬期には畑を致候得は飲心宜敷候、又夏期には氷
 に冷し候得は味尤も宜く候、要するに四季の御飲料とし
 て至極御便利の良酒に御座候
 ●ラム酒は、フリーセル油で中候酒毒無之候間御常用
 なされ候も決して中毒の憂無之候、適宜に御飲用を
 され候は、大に健康を助くる衛生酒に御座候
 ●ラム酒は味美にして價格頗る安く又少量にて
 酔を得ると多く御徳用に候間御酒家無二の好
 伴侶と存じ候
 ●ラム酒の容器には内務省衛生試験所分析
 表貼付有之候間御熟覽願上候

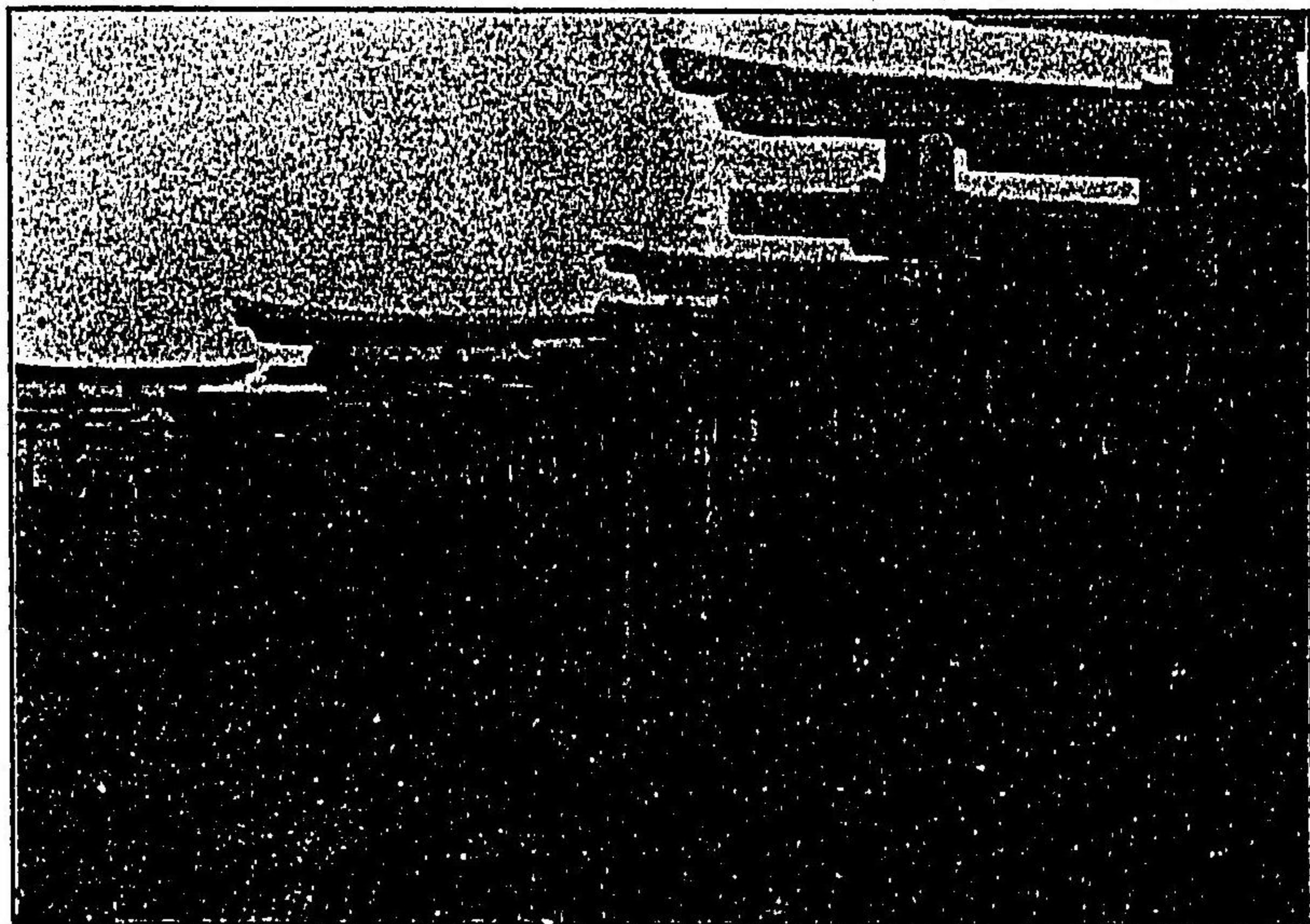
製造元 東京深川小名木川通

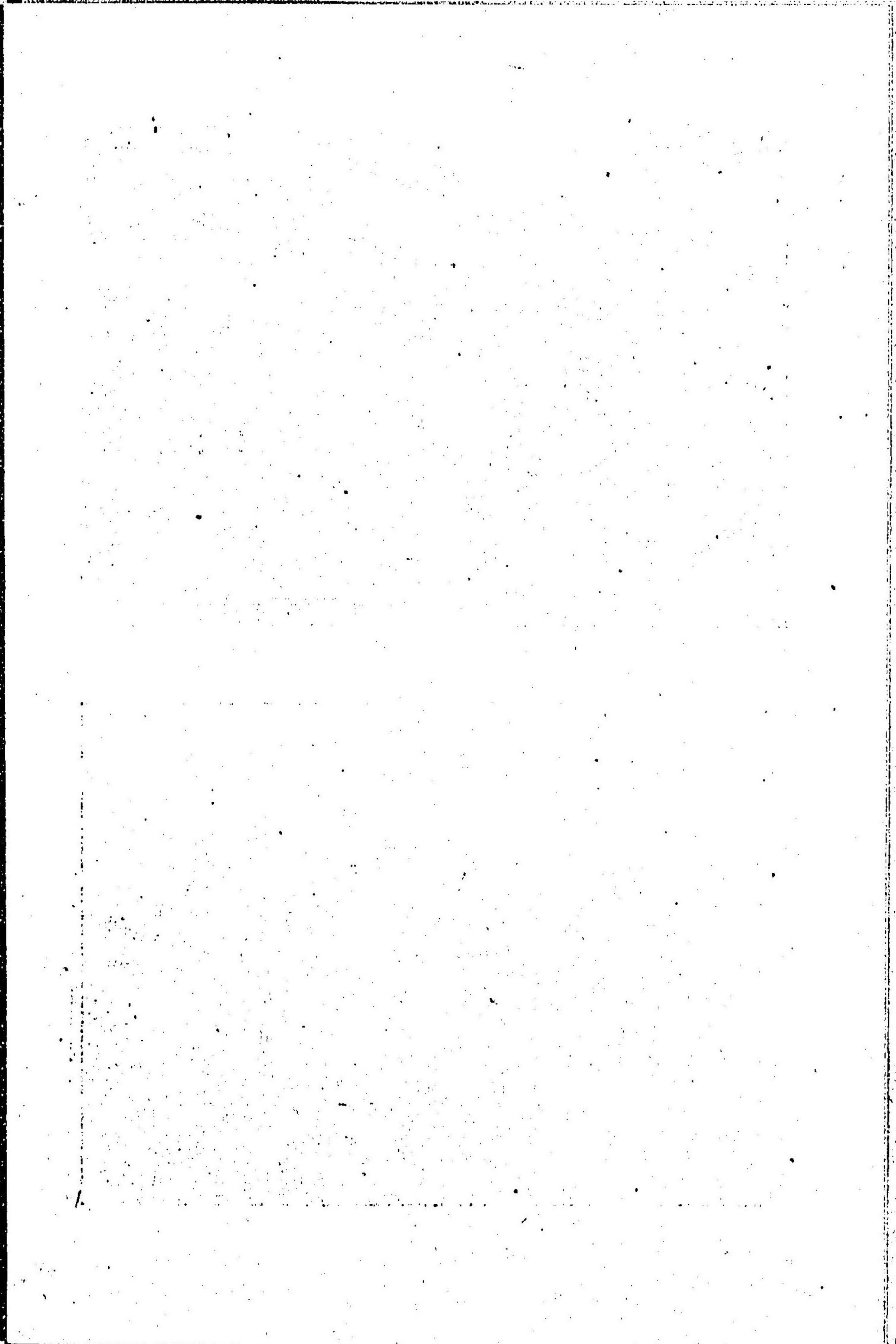
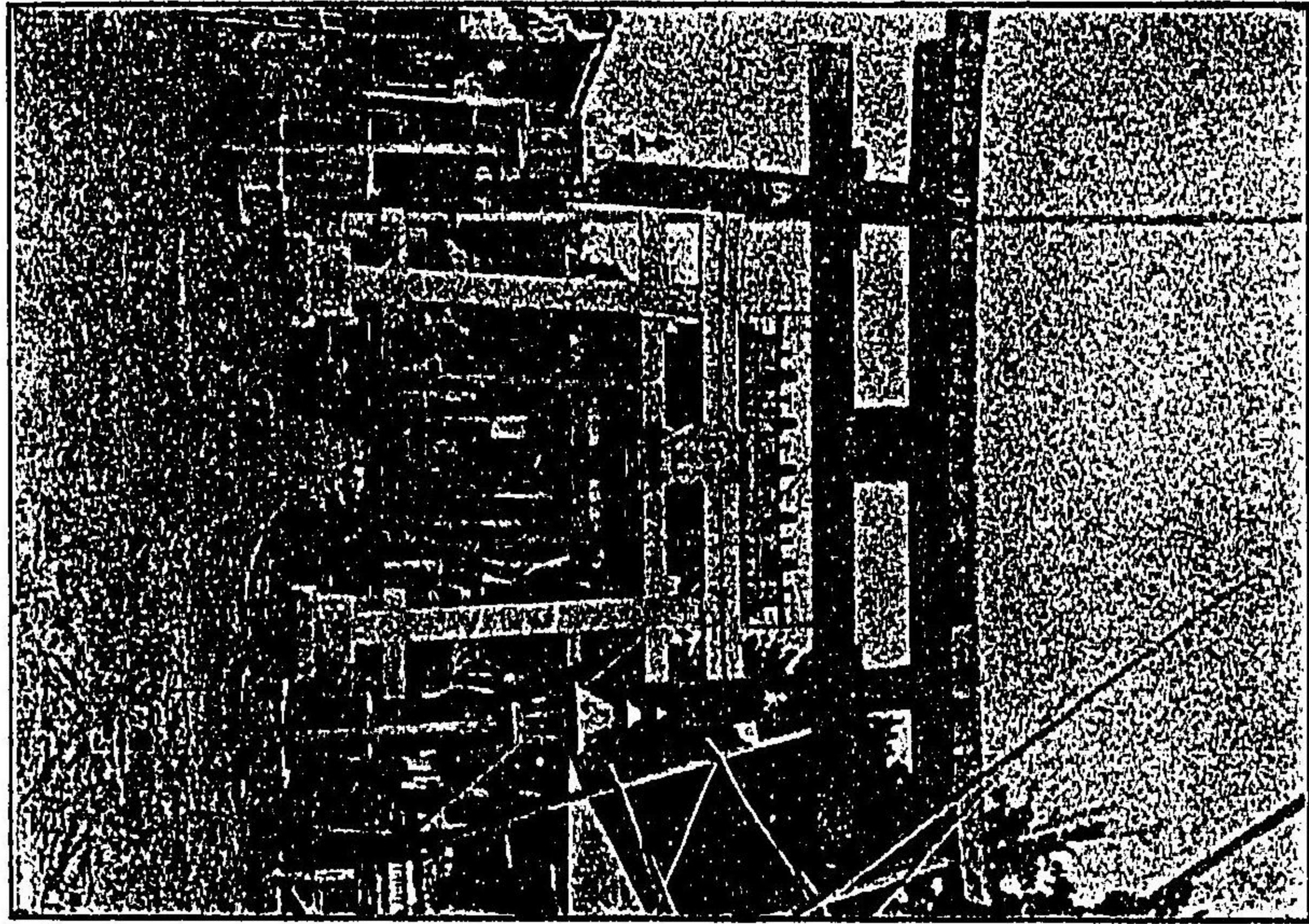
日本精製糖株式会社

發賣元 東京日本橋區小針町三丁目

ラム 販賣合資會社

電話掛花 千八百四十六番





穴守稻荷略縁起

東京府下武蔵國荏原郡羽田村字鈴木新田要島といひ又麻ヶ浦といひ東北隅の神森に稱へ辭竟へ奉つる穴守稻荷神社の起因は今を去ること七十年の昔し文政年中の頃とかや土地の豪族鈴木彌五右衛門なるもの新田を開拓しを以て鈴木新田といふ當時同家の倉庫の床下に一老狐の棲めることを發見せり而かも其の何れより來たり幾年を経たりしものかは知り難かりきといふ是より先き同家にては庭内に一字をいとなみ稻荷の神靈を祭りて新田の鎮護とせり蜀山人當時斯の地に足を止め初午祭を見て詠める狂歌に

とりたての魚も羽田の午祭波のつゝみに昔の葉の笛

神徳をあふさか浦に舞ひはやすをとり羽田の村の里の子

一讀、其當時を追慕するの念に勝へざらしむ斯くて安政三年の大風暴雨には全

村擧を水中に没したり此天災の激烈無慘なりしことは今も猶ほ古老爺の口説きとなり既にして名主彌五右衛門の嗣子常三郎は配下の百姓等を督勵して新堤に堤防を築く之れを新堤と稱ふ或日、常三郎庫中の老狐に向ひ新堤に移住すべきよし懇ろに諭しければいつとはなしに姿を隠しぬ後ち之を檢すれば果して新堤に九個の窠穴ありければ堤上に一祠を建てて老狐を祭ることとせり爾來三十年の春秋を重ねるの間此のこと誰一人語るものなく打過ぎければ土地荒れ葦萱の叢生に委し白晝猶ほ漁夫野人の往來することすら稀れなりければ此の邊りは只狐狸の住所とはなりにき

茲に鳴島某と云る漁夫あり日々近傍の池溝を以て小魚を獲るを營業とせり而るに常に獲たる魚のいつともなく失ふことの數々ありければ訝りつゝ注意すれば何んぞ圖らむ九穴の老狐子狐の交々來つて掠むるならんとは某つくづく思ふにこれは以前名主の床下に住みしものにて人事を解すと聞く左れば爲すべきやう

おらむと直ちに穴前に抵り低頭平身して人に物言ふ如くいひけるは吾が獲たりし魚の常に失ふはをなたらが掠むる爲なること今日初めて知りぬをなたらも食に窮する故なるべけれを吾れまた之を以て妻子を養ふものなり況して妻は長き病の床に臥するも名醫良藥を求むるに甲斐なく僅かに是等の魚介に頼りて心ならずも其の日々を暮らせりそなた能く神靈を持するあらは病妻をして速かに全癒なさしめよ其の功顯ありたらんには油揚赤飯もて報賽すべしと言ひすて更に其日獲たる殘魚を與へて立ち歸れり不思議といはんか怪しといはんか其の夜より彼の老狐、同人の家の附近を鳴き廻れりまた夢見ることも數々なりき三年越しの病妻も逐日心地よくなり幾日ならずして遂に全癒したりければ前約の如く油揚赤飯を供へて妻に禮拜せしめ已れも毎日參詣ししが此のこといつしか近隣に知られしかは甲語り乙傳へて生ひ繁れる雜草を押し分け刈り拂ひ道なき處を辿りく詣で來るもの日に多くなり程なく近郷近在、はては京濱の諸人にさへ

れ亘るに至りしなり 鳴島某に本祠社務所に在り

斯る有様なりければ明治十八年五月土地の有志者相議りて草莽を薙ぎ荒寥を開いて一の社殿を建立し其の秋十月、官に請うて公衆参拜の認可を得、は年の十二月廿八日なりき既にして京都伏見稻荷社の允許を申請し豊受姫命を祭神として穴守神社と稱へ奉つるに抵りぬ、後ち神職橋爪英麿を聘して神官となし越えて二十九年社務所を造立し又た有志者の寄附金を募り三十一年新たに千有餘間の道路を開き信徒参拜の便利を圖かる

因に記す穴守神社再興のため信徒總代となり日夜奔走し、は故金子市右衛門なり其の半途にして本祠の一大厄難に陥りし際 廿五、廿六、廿七年の頃一大厄難に罹り其の命旦夕に迫りしことあり 唯一人死を賭して復興策に盡瘁し其の功績顯著なるにより遂に本祠主任に擧げらる村人今に其の德行を稱揚して止まずといふ
抑も稻荷てふ稱へ辭は弘法大師より出で我か 朝にては山城の伏見を本社とす

和銅年中、此の神、初めて伊奈利山に現はる大師の東寺(京都)の門前に稻を荷ふの老翁に逢ひ約する言あり以て東寺の鎮守と爲す其の稻を荷ふの故に稻荷と名つるといふ一説には伊弉册の垂迹なりと後年、朝廷此の神を正一位に叙し正一位稻荷大明神と稱へ辭竟へ奉つるに至りぬ

此の神の利驗顯著なる幾萬世の久しきに傳へ其の終期かくることなきや彼の眞曲玉の如く然らん是れ實に東西南北に向ひて此の神の誇稱すべき一大特色なり其の未社續々建立せられ大小の祠宇、光を放ち其の利驗を垂れ耀かせり本祠再建以來未だ多くの年月を経ざるに其の利驗の顯著なる東京、横濱の兩市其の遠近に普及し殊には早に教坊の間、狹斜の巷に傳はり信徒俄に増加し年月に繁榮を極め近頃に至りては月に日に益々盛況となり其の平日と雖も老若男女の参詣人續々として跡を絶ちたることなし
由來本祠に祈願の善男善女等は方さに本願成就の徵を得れば禮賽滿願の證とも

て一の華表を奉獻するを恒例とす故に路傍に又は社殿背後に奉納する大小華表の夥しき實に幾千百に上り一ヶ月の奉納平均百五十餘基あり今や社殿の改築、神苑の設備其の外何、何と神域内外設計企畫の案、亦た多し其の隆盛繁榮豈に驚かざるを得んや蓋し此の神の利驗顯著なるの致す所にして都下無數の神祠に於てすら未だ見ざる所の好況を呈せり嗚呼、祭祀の靈、洋々乎として盛なる哉赫々然として明なる哉

神 穴

諸信徒の崇む御穴は本祠の右背に在りて窖上に小祠を建て周圍に屋を覆ひ中に數多の魚介及油揚等の供物山積して屋裡に充滿し常に信徒の交々穴前に額いて祈願を籠め窖中の土砂を掬ひ歸るあり由來其の土砂を店頭に撒布せは顧客多く商賈繁昌の功德ありと是等效坊の間、狹斜の巷に於ける待合、料理店、妓、幫間、藝人其他仲買店、相場師等に多し故に午の日の如きは穀擊肩摩、雜踏を極しむるに在り

御 籠

め婦女子の如きは窖前に近づくたも得能はさるへくまた時に靈狐の面を現すとあり之を拜視するもの正しく満願の徴なりとし欣喜雀躍他をして之を羨やまは之を曳くの音高しといふ

御 山

御山は本祠背後に在りて近頃京濱各講中の數千金を喜捨して築成するものにして其高さ社頭に聳へ全山疊むに石材を以てし各方より山頂に達するの曲徑數條

ありて其の下には隧洞を穿ち山後に徹通せしむ山上に攀登すれば一眸双眼の中
大森、川崎等を望見し東北は渺乎たる海上の風光遙かに安房上總の諸山を眺望
する等爽然自から心神をして快豁ならしむ

由來御山と稱する基因は京都なる伏見の稻荷山に本社ほんしゃの眷族末社けんぞくまつしゃの祠ほらを建て諸
の信徒己の日より午の日に掛け供物を携へ稻荷山を一周して其の處々に散在せ
る小祠せうしに拜し携ふる所の供物を供へて冥福を祈る該山の頂上てうじやうに在る三劍さんけんと稱す
奉つる明神みんじん審中の土砂つちすなの如き最も貴重にして歡喜せり
因よゝに記す三劍とは岩石の三つに截りたるものにして其昔そのむかし三條小鍛冶さんじょうせうがが祈誓
を籠め已れが鍛錬たんれんしたる所の刀劍やうけんを以て試みたるに果して感應ありて三條に
切れたりと傳ふ

社頭

本祠附近の光景は、數年間長足の進歩を爲し一の鳥居は遙かに羽田村と大森
村との本道に在り其二の鳥居前より本祠への兩傍約そ五町の間、漸次に田地菜
圃を埋め立て數十の家屋、軒を並べて建築し恰かも一長市街の觀を現はす是れ
悉く賽人の休憩所又は飲食店等にして他は供物神酒及び土産物目なし達摩だまの
（住吉踊り、陶製の白狐、蕙細工、玩具具等）又た名物としては蛤、シヤゴ、
蟹を齎もたらし各商店共に繁榮を極む且つ輓近斯の地より鐵鑛泉の湧出せるを發見し
浴場を設けて割烹を爲し宿泊を兼ねるものあり

風景

斯の地、春時に在りては海潮漣波を寄するの汀に干潮を踏みて貝拾するの遊事
あり海士が漁り遠浦の帆影、點々手に掬すべく眸を回らせば麥隴菜圃、青黃の
色を交へ一島の風色宛から盆景を見るか如し夏秋の候に在りては最も避暑納涼
に適し鑛泉に都門の紅塵を洗ひ蝦取りの流れに一糸を垂れ或は近浦に網するも
興あり冬時は小春の散策に都門よりの道、遠からず獵銃を負うて汀渚に水禽を

ありて其の下には隧洞を穿ち山後に徹通せしむ山上に攀登すれば一眸双眼の中
大森、川崎等を望見し東北は渺乎たる海上の風光遙かに安房上總の諸山を眺望
する等爽然自から心神をして快豁ならしむ

由來御山と稱する基因は京都なる伏見の稻荷山に本社ほんしゃの眷族末社けんぞくまつしゃの祠ほこりを建て諸
の信徒己の日より午の日に掛け供物を携へ稻荷山を一周して其の處々に散在せ
る小祠に拜し携ふる所の供物を供へて冥福を祈る該山の頂上に在る三劍と稱べ
奉つる明神箬中の土砂の如き最も貴重にして歡喜せり

因に記す三劍とは岩石の三つに截りたるものにして其昔し三條小鍛冶が祈誓
を籠め已れが鍛錬したる所の刀劍を以て試みたるに果して感應ありて三條に
切れたりと傳ふ

社頭

本祠附近の光景は、數年間長足の進歩を爲し一の鳥居は遙かに羽田村と大森

村との本道に在り其二の鳥居前より本祠への兩傍約そ五町の間、漸次に田地菜
圃を埋め立て數十の家屋、軒を並べて建築し恰かも一長市街の觀を現はす是れ
悉く賽人の休憩所又は飲食店等にして他は供物神酒及び土産物目なし達摩(滿願の
點して柄)住吉踊り、陶製の白狐、蕪細工、玩具具等又た名物としては蛤、シヤコ、
蟹を鬻ぎ各商店共に繁榮を極む且つ輓近斯の地より鐵鑛泉の湧出せるを發見し
浴場を設けて割烹を爲し宿泊を兼ねるものあり

風景

斯の地、春時に在りては海潮漣波を寄するの汀に干潮を踏みて貝拾するの遊事
あり海士か漁り遠浦の帆影、點々手に掬すべく眸を回らせば麥隴菜圃、青黄の
色を交へ一島の風色宛から盆景を見るか如し夏秋の候に在りては最も避暑納涼
に適し鑛泉に都門の紅塵を洗ひ蝦取りの流れに一糸を垂れ或は近浦に網するも
興あり冬時は小春の散策に都門よりの道、遠からず獵銃を負うて汀渚に水禽を

驚かすも又鴨場に鴨を網するも妙にして山上枯野を望み盡くる所白扇倒しまに掛る富嶽の雪景、是れ當所四季の一景物なるべし

講社

京濱の兩市、其他各地方に於ける本祠信徒の團結を稱して講中といふ創祠以來逐日多きを加へ現在の講名及び其の講元を左に掲げぬ

- | | | | | | | | |
|---------|-------|---------|---------|---------|-------|----------|--------|
| 東京元講 | 木村 莊平 | 東京御神酒講 | 前田 史助 | 東京吉原講 | 野口 銀藏 | 月參講 | 小澤 雄藏 |
| 東京穴守講 | 新井萬次郎 | 御膳講 | 鈴木 榮吉 | 東京稻穂講 | 柴崎錦二郎 | 開運講 | 石波 幸吉 |
| 東京出世元講 | 大内 幸吉 | 一心講 | 福田 清吉 | 御供米講 | 船田喜重郎 | 日の出講 | 原田 藤直 |
| 東京寶玉講 | 打越徳三郎 | 東京御神講 | 植木 竹松 | 東京千歳講 | 堀 龜次郎 | 横濱穴守明榮講 | 佐藤吉五郎 |
| 東京神徳講 | 土屋新十郎 | 羽田青物講 | 福石兼次郎 | 海運講 | 鈴木音次郎 | 京寶講 | 橋爪 徳吉 |
| 羽田講 | 秋元繁五郎 | 開運講 | 内田市太郎 | 東京睦美講 | 松村 榮吉 | 東京魚がし講 | 直井榮次郎 |
| 東京深川麻講 | 板橋菊五郎 | 板橋青物講 | 伊藤甚五右衛門 | 東京青物講 | 白井 石松 | 東京御供物講 | 福室 兼吉 |
| 東京陸講 | 柴田菊次郎 | 東京御神水元講 | 灰谷 虎吉 | 東京水行講 | 田井 善藏 | 横濱榮久講 | 増田 勇三 |
| 東京寶明講 | 内藤半次郎 | 東京淺草寶明講 | 澤田伊勢吉 | 福徳講 | 加藤幸次郎 | 東京立身講 | 山ノ内松之助 |
| 東京横濱水懸講 | 森 雄次郎 | 神徳講 | 金子 長吉 | 東京元神泉講 | 鈴木伊兵衛 | 東京月參講 | 福島 政吉 |
| 開榮講 | 鈴木太四郎 | 守川講 | 早川竹次郎 | 東京親友講 | 林 筑藏 | 東京北銀講 | 中川兼太郎 |
| 東京四蠟蠅講 | 鈴木吉五郎 | 東京本淺蠟蠅講 | 岡田 金司 | 東京石橋講 | 宮水 新吉 | 東京明照講 | 太田 勇松 |
| 榮久講 | 山口増太郎 | 榮久講 | 市原辰五郎 | 横濱羽田稻荷講 | 矢野 儀助 | 横濱御膳講 | 宮下 ツタ |
| 東京新盛講 | 内山 利助 | 東京八千代講 | 齋藤銀之助 | 東京本所常樂講 | 秋野 豊吉 | 全内陣五講常樂講 | 宮下 ツタ |
| 大森御供講 | 森 伊 吉 | 東京日本橋講 | 筒井又之助 | 東京敬神講 | 河合 信 | 東京水懸講 | 坪井金兵衛 |
| 東京泰幣講 | 住水 貞輔 | 東京泰張講 | 石櫻 房吉 | 走水講 | 大石長三郎 | 敬神講 | 常木米太郎 |

明治三十四年中 午の日

- | | | | | | | | |
|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 七月 | 三日 | 十五日 | 廿七日 | 十月 | 七日 | 十九日 | 卅一日 |
| 八月 | 八日 | 二十日 | 九月 | 十一月 | 十二日 | 廿四日 | |
| 九月 | 一日 | 十三日 | 廿五日 | 十二月 | 六日 | 十八日 | 三十日 |

(以上各講は明治卅四年六月一日現在のものにして何れも組織順なり)

- | | | | | | | | |
|---------|--------|---------|--------|---------|-------|---------|--------|
| 東京常燈講 | 米屋十兵衛 | 東京芝常樂講 | 豊澄辰五郎 | 東京御洗米講 | 吉田治三郎 | 東京南盛講 | 篠田 和助 |
| 東京向運講 | 機澤紙太郎 | 東京福徳講 | 大場 又藏 | 東京本陸講 | 田中芳之助 | 東京白段三社講 | 青木 定 |
| 東京陸愛講 | 永富 定親 | 東京御神水講 | 古谷淺次郎 | 東京親祐講 | 丸川徳次郎 | 東京御鏡講 | 江原 豊吉 |
| 東京朝日講 | 小林 源六 | 〇鳩講 | 島海竹次郎 | 東京稻荷講 | 淺井卯兵衛 | 東京友惠講 | 高橋 榮藏 |
| 東京第一福壽講 | 石黒銀太郎 | 東京第二福壽講 | 瀬登菊次郎 | 東京第三福壽講 | 丸山松太郎 | 東京第四福壽講 | 永井徳五郎 |
| 東京第五福壽講 | 中村 重吉 | 東京第六福壽講 | 濱田外次郎 | 東京第七福壽講 | 辻 伊十郎 | 東京第八福壽講 | 佐伯銀次郎 |
| 東京御備講 | 松井豊太郎 | 一心講 | 宮城政之助 | 東京太鼓講 | 萩野 専吉 | 東京寶珠講 | 山崎源五郎 |
| 東京親愛講 | 關口藤五郎 | 東京明治講 | 橋本平右衛門 | 東京東四講 | 萩野 専吉 | 東京寶珠講 | 吉田銚三郎 |
| 東京下谷講 | 鈴木岩右衛門 | 東京千巻講 | 岩城繁太郎 | 東京百明講 | 山田 吉藏 | 東京清元講 | 原 金太郎 |
| 東京童子講 | 夏目 要平 | 東京末廣講 | 澤村忠次郎 | 水櫃講 | 和田 吉藏 | 羽田稻荷講 | 今澤 幸平 |
| 羽田稻荷講 | 原澤 源平 | 羽田稻荷講 | 橋本富次郎 | 羽田稻荷講 | 三木初次郎 | 羽田稻荷講 | 瀧口定右衛門 |
| 羽田稻荷講 | 大嶽源次郎 | 羽田稻荷講 | 鈴木 源七 | 羽田稻荷講 | 板倉 安平 | 東京心願講 | 渡邊 長平 |
| 東京神託講 | 藤田 喜平 | 東京共同講 | 瀧口 源七 | 縁組講 | 淺野 重太 | 東京明喜講 | 田代典四郎 |
| 東京當燈講 | 杉本勝太郎 | 東京午ノ日講 | 藤水儀右衛門 | 東京共信講 | 新美兵次郎 | 東京明喜講 | 水村 佐七 |
| 實心講 | 渡邊勘兵衛 | 東京開運講 | 加藤角太郎 | 東京積善講 | 柴田源三郎 | 東京通草女人講 | 小林 與八 |
| 開基講 | 村石 又吉 | 高泉講 | 安藤 忠藏 | 東京積善講 | 柴田源三郎 | 東京通草女人講 | 鈴木 勝之 |

本祠社務所主任故金子市右衛門翁が本祠及公共事業の爲めに盡し、事績は石に彫せられたり即ち左の如し

金子市右衛門翁は、其の行已に克己禮に復れその古き訓に背かず、その心進みて公益を廣めよ、この
かなひ慈母を好み深茶を勤め、身健に力強く難きに 奮りて危きに臨むもたじろざる性質なりき、先祖は平氏より出て世々
大森にすみ市右衛門と名のりぬ、父の幼字は勝五郎、此の人家を羽田に移し開墾の業を營み、一男三女をまうく男はぬしなり、ぬし
拾九歳にて妻を迎へ一子ありし、四年の後父と妻とを べで世を去りし、ぬしの悲 譬へむに物無く、心亂れ身衰へ殆狂せ
むとす、母は同村田村氏の女、名をりんといひ賢にして能く子を導き、風に興き夜に寝みみづから機織の事に従ひし、ぬし
之に勵まされ再婚ひて業にいそしみ、一 船に千重の波をわけて下總あたりまで行向ふこと難なりき、廿七歳の時更に娶りて今
の市右衛門を生む、さきに生れしは清吉といへり、明治七年この村の洲先に探藻場の出来し、ぬしが同業者に率先して力を盡し
にふる、明治十八年の頃この穴守神社にたく損はれて、草原ともなりはつべくおぼし、ぬし見るに忍びず人々計り總代を定
め、已もその中に在りて、きし間に、之を奇貨として私を營み、清き正しきわしが體面を せるしれいいて來りし、ぬしいたく
怒り一たびは大事にも及ばんとせしを、克己の美質はぬしをして禮に復らしめ、總代等も権限を約し神社一切の事をぬしに委任し
たりしかば、それより社の傍に住みて、措擲無勉慚たる經營の中より社殿の光輝を回復せしめ、遂に今日の盛況を顯しぬ、あくる
廿八年に探藻試育場創立の首唱となり、百難を排してからく官の許を得、同業者に推されて幹事となり重ねて海面總代に擧げられぬ
廿九年穴守神社社務所を遺立し、卅壹年となりては信徒参拜の便利をはかり、志有る人々の寄附金を募り新に千石 間の道路を開き
事成りて直に官に献じたり、是等の功は講學の士もたやすく羨し得ざる所なるに、ぬしむげの農漁より出て苦を忍び辛に耐へ、
く之をなし遂げたるは敬神の念、公共の心厚く深かりし爲ならむ、明治廿三年五月四日六十四歳にてみまかりぬ、今の市右衛門翁を
穴守社邊に建て、父の行狀を彫らむとして文を予に乞はる、予その孝にめでたいなみならず記し擧りて歌ひけらく

聖幸ふ神を敬ひ 玉錦の道を開きし このぬしがまめなる心
此翁の 大い効は里人の語りつきつゝ
萬代に千代にのこらむ 石はもと建ても建てずし
文はよも彫りもゑらすし
朽つる日あらめや たゆる時あらめや

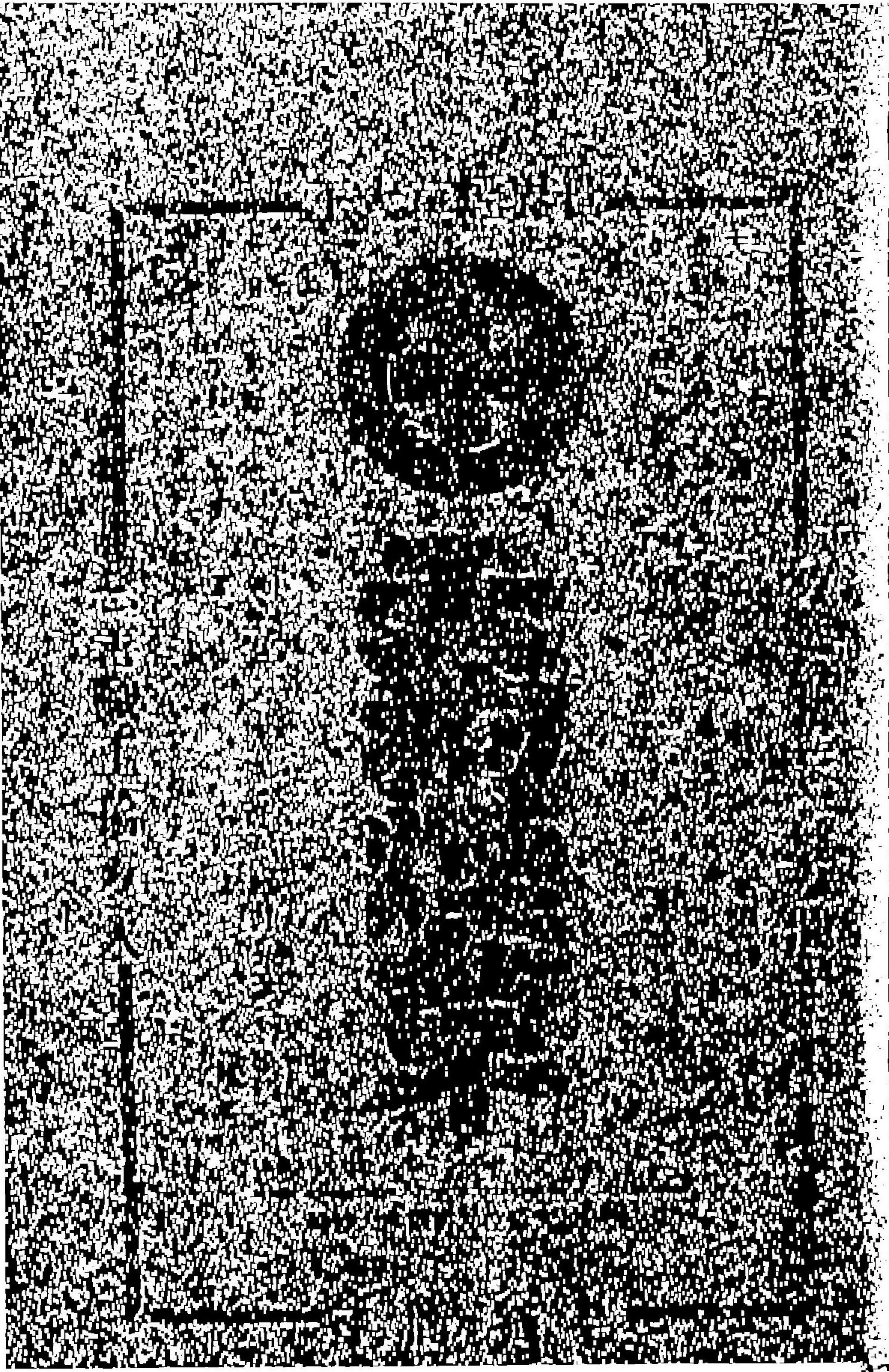
順路

穴守稻荷参詣の道しるべを左に示す但し東京より起る

- 一 新橋停車場より瀛車にて大森驛に下車(其間十九分間)し蒲田村より左り本祠への本道一の鳥居を潜り一直線、蝦取川の渡船場を渡り本祠へ至るを本道とす
- 二 同しく大森の町内川橋の先き穴守神社道と傍示せる曲路ありて之を近道とす
右沿道折曲の所には必ず指さしたる東京賣薬店天然堂一二三の廣告兼道しるべの傍示ありて之れを道しるべとす

- 三 同しく大森驛より電氣鐵道に乗し蒲田に下車し夫れより第一項の順路を取るなり
- 四 大森停車場より数町歩行して濱邊に至れば穴守神社行共同乗合船場あり之れより舟行するも亦た便なり此の舟、社頭蝦取川渡船場の傍に着す(船賃十錢歸り船賃十二錢)乗船時間満潮なれば凡そ一時間、干潮なれば二時間餘を費すも天氣快晴にして海上、静かなるときは舟中の眺望、頗ふる快當にしてまた一趣の興味あり

五 新橋、大森間瀛車發着時間及び其一、二、三等の乗車賃錢左の如し



濟世至寶
軍旅必備

大正
商標
角田
守田治兵衛

MORITA'S HÖTAN.

起死回生
寶丹

癸未年二月良辰版

大正年始、是製、世に於て、近來、世に於て、
良劑也、効、百毒、解、常、小、懷、中、其、機、小、
臨、人、之、之、必、身、之、健、全、無、病、之、大、幸、
と、得、之、を、之、に、疑、い、あ、ら、ず、

官許本家

東京池田橋通
大拾七番町有地

守田治兵衛



明治十一年、從警、視、廳、蒙、軍、用、之、命、也、



明、治、十、一、年、三、月、廿、一、日、
大、學、東、亞、大、學、許、可、特、許、商、標、

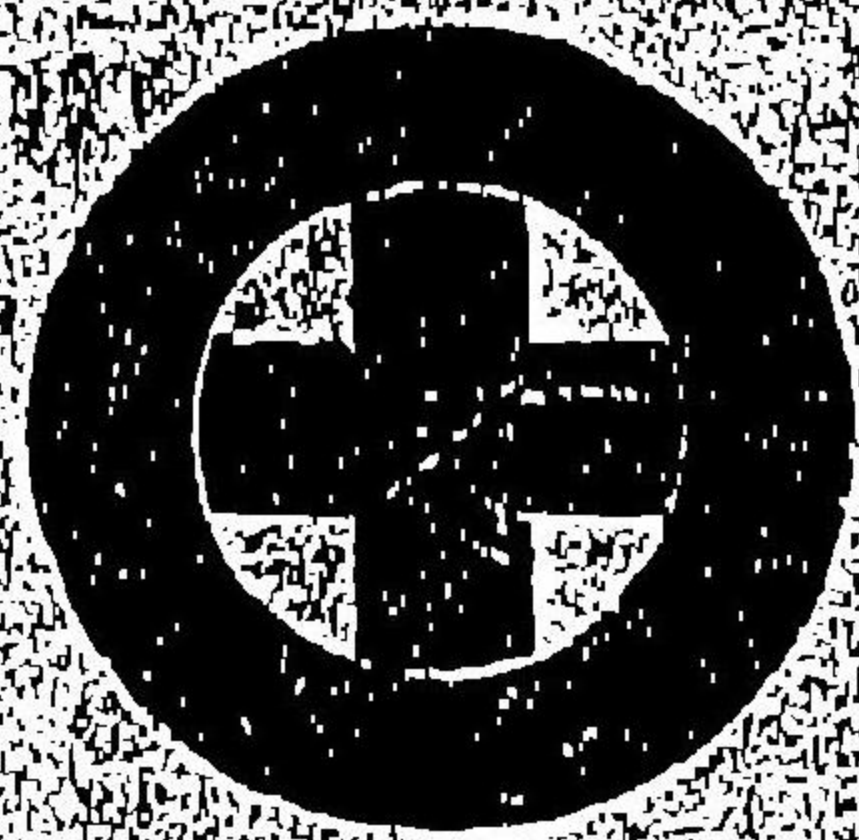
MORITA JIHEI.
No. 27, Nakarito, Itzohata Tokio, JAPAN.

價
金
五
拾
圓

寶丹効能

- 吐瀉症
- 霍亂
- 氣附
- 痢病
- 痧痢
- 中暑
- 感冒
- 癩聚
- 頭痛
- 食傷
- 停飲
- 氣鬱
- 眩暈
- 感染病
- 虫齒
- 心腹痛
- 噎氣

世界煙草大王



天狗煙草

天狗煙草ハ愛國仁士ノ高節ト糞糞ナル全國煙草同業者ノ
愛顧トニ依リ一週千里騎虎ノ勢ヲ以テ累計加倍ノ進歩ヲ
爲セリ隨テ販賣ノ所ナリ

尙増々奮勵平素ノ志氣ヲ振ヒ冠草界ニ如何ナル下ヲ示スト
山ノトモ挺身其衝ニ當リ彼レヲシテ敗ル者ニシメズ諸君御
安心ナレ

勿驚税金二百萬圓

慈善職工拾万人

商位大位一商
東京 岩谷
銀座 會商

MORITA'S HŌTAN.

起死 寶丹

大正五年二月十日 明神社 授許 後之許 向海内者之 許す 東京 市 区 本 町 一 丁目 〇 番 地

大正五年二月十日 明神社 授許 後之許 向海内者之 許す 東京 市 区 本 町 一 丁目 〇 番 地

MORITA JIHEI.
No. 27, Nakacho, Hanzabata Tokio, JAPAN.

官許策家 東京 市 区 本 町 一 丁目 〇 番 地 守田治兵衛

〇 吐瀉症 〇 霍乱

〇 泄瀉 〇 氣附

〇 痢病 〇 疝痢

〇 中暑 〇 感冒

〇 瘧聚 〇 頭痛

〇 食傷 〇 停飲

〇 氣鬱 〇 眩暈

〇 感染病 〇 虫齒

〇 心腹痛 〇 嘔氣

- 〇 吐瀉症
- 〇 泄瀉
- 〇 痢病
- 〇 中暑
- 〇 瘧聚
- 〇 食傷
- 〇 氣鬱
- 〇 感染病
- 〇 心腹痛
- 〇 霍乱
- 〇 氣附
- 〇 疝痢
- 〇 感冒
- 〇 頭痛
- 〇 停飲
- 〇 眩暈
- 〇 虫齒
- 〇 嘔氣

電話

讓受讓

●弊店取扱は極めて確實を旨とし直段に掛引なく取扱に聊か詐りなし

取扱

日本橋區通四丁目四番
電話本局 八十六番

柴田商會

●弊店は電話の間屋をれば質買共に少しも手数を煩すことなく取引極めて安全なり

現金大安賣

他店とは心三州方安売

薪炭問屋

本郷區湯島
四丁目七番地

井上商店

現金大安賣

御二番大常甲速持仕屋

田虫水虫必治藥

本州田虫、新やけ、水虫、疥癬、皮膚病、蚊咬、蜂刺、火傷、湯傷、その他、皮膚病、に、一、度、使、用、す、と、即、ち、治、癒、す、る、奇、効、の、藥、也、

實効散 天然堂製

取次所、東京、本郷區、湯島、四丁目、七番地、井上商店、

寫眞製版 寫眞撮影

寫眞製版、寫眞撮影、各種、寫眞、印刷、

自今一月十五日之休日

ヲ止メ日々撮影仕候

小川一眞

東京新橋日吉町
小川寫眞製版所

電話新橋三九六番



家傳氣痛脚瀉

●かつかい 患者服 奇効可驚 本劑は天下公衆の喝采を博したる 奇効卓絶他に比類なき家傳の妙藥

●むくみ ●血脚氣 ●乾脚氣 ●産前産後のかつかい ●むねつかい ●しびれ痛が ●むねはらはり ●どうき ●足の筋腫 ●胸腹痛 ●小便不通 ●遺毒 ●其外脚氣より 起る諸症に卓効あり ●如何なる脚氣にても此藥を飲めばすくなくする事妙なり

貼にて治す難症も拾五貼用ゆれば 全治請合ひ殊に本劑は飲と忽ち効能顯われ癒ひ脚師の見放し たる年來不治の大患も脚治りに全治せむめに附せし 體狀澤山あり 猶近諸新聞紙上に喝采を得たる世界唯一の脚氣妙藥なり ●本劑に脚氣養生書一冊を添

●一貼入 金拾五錢 郵費は淺草七軒
●三貼入 金拾五錢 郵費は淺草七軒
●五貼入 金拾五錢 郵費は淺草七軒
●七貼入 金拾五錢 郵費は淺草七軒
●拾五貼入 特製紙圓 郵費は淺草七軒

本舖柴田美津小

大賣捌

●全國到る所の藥店にあり

神田 大木合名會社

神田 福井甚藏



直輸入専賣自轉車名

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

直輸入専賣自轉車名

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

直輸入専賣自轉車名

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

直輸入専賣自轉車名

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

各種自轉車 各種自轉車 各種自轉車

富城車店

東京 京橋 銀座 座敷 日六番地

電話架設中

服部時計店使用

○帝國臣民必須の掛物出版

大日本帝國
今上天皇陛下
皇后宮陛下
皇太子殿下

落款

書箋紙半折摺り
一枚金貳拾五錢
郵税一枚金四錢
十枚以上上貳割引
廿枚以上上三割引
卅枚以上上四割引
但し前金を要す

本書は故伯爵勝海舟先生謹厚の鐵腕を呵し戟筆を揮はれたる紀念の絶筆にして一九〇〇年
ひ本書を披けば墨痕淋 筆勢飛動雲躍り龍上るの概あり
之を掛物として床の間に掲ぐれば忠 君愛國の志念進り神洲民の一日も座右を缺く
べからざる天上天下唯一の好鑑たるべし大方の諸彦陸續購求の榮を賜へ
字面は木版鑿刻、精巧微妙、印刷鮮明、落款雅麗、一目優に眞物に異ならず

發行所

東京本郷區春木町
二丁目六十二番地

全國社寺取調所

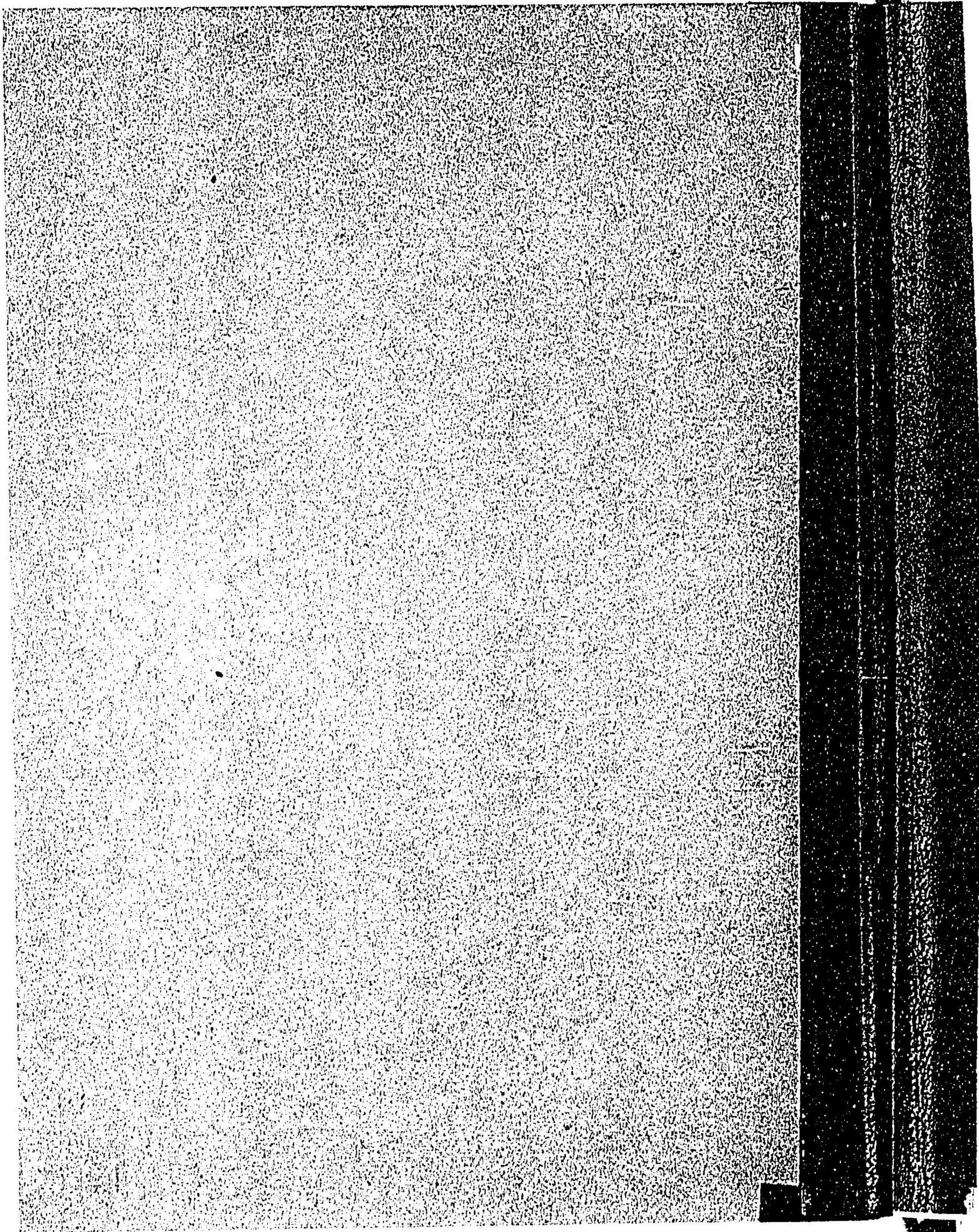
電話本局 三千八百五十番

宮内省御用
惠比壽ビル

東京目黒

日本麥酒株式會社

電話新橋
四〇八五



8

4

穴守稻荷縁起

国立国会図書館

013797-000-0

特48-744

穴守稻荷縁起

杉本 嘉次郎/編

M34

ABB-0006



